

2007 年

第 19 回八大学 OB 大会

菱

RYOU

目 次

1. ご挨拶	九州大学	中村 恒美 3
2. 年度報告		 4
活動報告及び試合結果	九州大学	大会実行委員 原 浩 5
平成19年度会計報告	九州大学	幹事 原 浩 7
3. 記念写真		 8
八大学ラグビーOB親善ラグビー大会		 9
年末講演会		 12
4. トピックス		 15
H19 講演会記録ダイジェスト 帯広畜産大 1980 年卒 小林 誠		 16
(2007 年 12 月 5 日開催@緑丘会館)			
「2007 ワールドカップ カーワン JAPAN 斯く戦えり」			
ー 同行取材の朝日新聞 中川記者、ｽﾍﾟｰﾁｬｲﾀﾞｰ永田氏が熱く語る ー			
5. 各大学投稿		 31
東京マラソンに参加して	北海道大学	1980 年卒 川端 亮二 32
中年ラグーマン誕生秘話	東北大学	1987 年卒 北嶋 知樹 34
大学統合によって	東京海洋大	1978 年卒 吉永 辰雄 36
48 歳でのラグビーとの新たな出会い			
	小樽商科大	1974 年卒 中島 文雄 37
ケガとラグビーの自分史	九州大学	1984 年卒 原 浩 39
秩父宮への道はローマへの道に通じる			
	帯広畜産大	緑白クラブ 41
ビジネスで気づいたラグビー部を強くする方法			
	名古屋大学	2000 年卒 門脇 純 42
西陵ラグー戦後復活劇 ー ラグビーへの情熱と勝利への執念 ー			
	長崎大学	1970 年卒 辻 克彦 44
6. 編集後記	九州大学	1971 年卒 丸田 堅次 48

ご挨拶

大会会長 中村恒美
九州大学 1970 年卒

平成 19 年 5 月 19 日（土）午前 10 時に、第 19 回八大学ラグビー親善大会は、東京海洋大学越中島グラウンドで予定通り K0 されました。

今回も東京海洋大学OBのご尽力により、いいグラウンドの確保が出来ました。雨模様が気になっていましたが、予報どおり開始前から降り始めました。特に、第一試合は集中豪雨に見舞われ、その後の試合運営が危ぶまれましたが、第 2 試合の開始される頃には雨が止み、何とかそのまま試合を続行することができました。

予定通り、各大学若手 OB 戦四試合、オーバー40 紅白戦一試合は実施することができましたが、若手による東西対抗戦はグラウンドコンディション等から中止となりました。負傷者はありませんが、救急車を呼ぶような大きな怪我はありませんでした。

参加者 170 余名で、応援席も驚く好プレーあり、珍プレー（？）ありでエンジョイできた大会だったと思います。時間が繰り上がったアフターファンクションも、なんとか雨も降らずに無事終了し、大学別のミーティングへと会場が移りました。

毎年のことながら、ラグビー好きが集まるこの大会が 19 回続いていることは素晴らしいことであり、ご参集いただいた方々には本当に感謝申し上げます。今後も各大学の仲間を誘い合わせ、息の長い大会として継続することを希望します。

昨年末には、恒例の忘年会兼講演会が 12 月 6 日（水）に会場も例年通り、池袋サンシャイン 57 階の小樽商科大学クラブハウス「緑丘会館」で開催され、70 余名の参加がありました。

記念講演は、帯広畜産大学OB小林様のご尽力により、2007 年ワールドカップフランス大会に同行した朝日新聞の中川記者とスポーツライター永田氏にお願いして、『2007 ワールドカップ カーワン JAPAN スく戦えり』と題して、現地での熱い話題を語っていただきました。

二つの大きなイベントを無事開催することができたのも、いつも多大なご協力をいただいています日本ラグビー協会関係各位及び、各大学OB関係各位のご尽力の賜物と、心より厚く御礼申し上げます。

2007 年度報告

平成19年度 八大学ラグビーOB会活動報告

1. 八大学ラグビーOB親善ラグビー大会

- (1) 開催日時 2007年5月19日(土) 10:00～
- (2) 開催場所 東京海洋大学越中島第2グラウンド
- (3) 参加人数 プレーヤー:167名、家族:9名

【開催概要】

- ・八大学対抗のOB戦は、谷口弘RF(日本協会)、加藤RF(関東協会)の笛のもと、5試合を行いました。
- ・第1試合は、突然の土砂降りの中での試合となったが、その後は、天候も回復し、まずまずの天気恵まれ、OVER40を含め試合を行うことができました。
- ・幸いにもラグビー保険を申請するような大きな怪我人の発生はなかった。
- ・また、懇親会については、天候の急変も心配されたが、明治丸前の屋外芝生広場で開催することができました。

【親善試合結果】

- 第1試合 10:00～10:40 RF:谷口氏
九州大学 17 — 5 長崎大学
- 第2試合 10:50～11:30 RF:加藤氏
東京海洋大学 7 — 19 北海道大学
- 第3試合 11:40～12:20 RF:谷口氏
名古屋大学 50 — 0 東北大学
- 第4試合 12:30～13:10 RF:加藤氏
小樽商科大学 15 — 21 帯広畜産大学
- 第5試合 13:20～14:05 RF:賞雅氏
東軍 29 — 12 西軍
OVER40・OVER50

2. 年末講演会

- (1) 開催日時 2007年12月5日(水) 19:00～
- (2) 開催場所 サンシャイン60 57階 緑丘会館
- (3) 参加人数 75名

【開催概要】

- ・『2007ワールドカップ カーワンJAPAN スく戦えり』と題しまして、同行取材の朝日新聞 中川記者、スポーツライター永田氏が熱く語って頂いた。
- ・また、関東ラグビーフットボール協会の貴島副協会長、水谷理事長、ラグビー大会で笛を吹いて頂いた谷口弘RF、昨年度の講演会の講師のスポーツライター大友氏、司会進行役の四谷アナウンサー等多数の来賓の方々にもご参加して頂いた。
- ・来賓の方々からは、懇親会の中でご挨拶をしていただくとともに、各大学の記念撮影にもご参加頂いた。

《講演者略歴》

○中川 文如（なかがわ ふみゆき）氏 1975 年生まれ。

- ・朝日新聞記者。東京編集局スポーツグループ勤務。
- ・98 年入社。盛岡支局、北海道報道部、西部報道センターを経て現職。
- ・西部報道センター時代の 2003 年からラグビーの取材を始め、06 年 4 月の東京転勤とともに本格的にラグビーを担当。
- ・早大学院と早大（大学公認サークル「リスの会」）で選手としてプレー。

○永田 洋光（ながた ひろみつ）氏 1957 年生まれ。横浜市大文理学部卒。

- ・フリーランススポーツライター。江戸川大学非常勤講師。
- ・『ラグビーマガジン』誌を中心に、スポーツ新聞や『Number』にもラグビー記事を寄稿。
- ・著書は『日本ラグビー原論』、『日本ラグビー復興計画（宿澤広朗と共著）』、『元木由記雄一桜のプライド』、『勝つことのみが善である－宿澤広朗全戦全勝の哲学』、『勝利がすべてを変える（監修 著者はジョン・カーワン）』など。

平成19年度 八大学ラグビーOB会 会計報告

収入	金額	支出	金額	収支
前年度からの繰越	715,871			
ラグビー大会				
参加者: 167人 × 3,000	501,000	グラウンド使用関係	35,204	
家族: 9人 × 1,000	9,000	ケータリング	220,000	
		酒代	57,259	
		ボール	21,000	
		ラグビー保険	24,000	
		レフリーお車代	20,000	
		菱印刷製本費	24,326	
		文具代	2,889	
		諸雑費	22,685	
小計	510,000	小計	427,363	82,637
年末講演会・忘年会				
参加者: 75人 × 3,000	225,000	緑丘会館	195,900	
講師著作本販売収益	14,250	講師お車代	60,000	
		ビデオテープ	879	
		二次会補助費	2,860	
小計	239,250	小計	259,639	-20,389
その他				
利息	562	6大学(H10)返還金	300,000	
		同上振込手数料	2,340	
		コピー代	270	
小計	562	小計	302,610	
合計	1,465,683	合計	989,612	476,071

本件は、2月13日開催の幹事会に報告の上、各大学幹事によりご承認頂きました。

原 浩(幹事校 九州大学 昭和59卒)

東京海洋大学
幹事 吉永辰雄

記念写真

【記念写真】 その1

平成19年5月19日（土）
東京海洋大学グラウンド



① 九大



② 長崎



③開始直後の雨中戦（縞はテントの雨だれ） ④ずぶ濡れ・疲れたね（九大と長大）



⑤ 東京海洋大学



⑥ 北大

【記念写真】 その 2



⑦ 小樽商科大



⑧ 帯広畜産大学



⑨名古屋大学



⑩東北大学



⑪オーバー４０＆５０



エール交換 帯広畜産大

【記念写真】 その3



エール交換 小樽商科大



エール交換 北海道大学



エール交換 東北大学



エール交換 東京海洋大



エール交換 名古屋大学



エール交換 長崎大学



エール交換 九州大学

【記念講演写真集】 その1



講演中の永田氏と中川氏



講演中の永田氏と中川氏



幹事校あいさつ 九代OB永淵



懇親会 関東協会 水谷理事長ほか



懇親会 四家アナほか



関東協会 貴島副協会長

【記念講演写真集】 その2



関東協会 水谷理事長



日本協会 谷口R F



スポーツライター 大友氏



テレビ東京 四家アナ



来賓及びその他の参加者



北海道大OB & 帯広畜産大OB

【記念講演写真集】 その3



小樽商科大OB & 東北大OB



東京海洋大OB & 名古屋大OB



長崎大OB & 九州大OB

トピックス

H19 講演会記録ダイジェスト
(2007 年 12 月 5 日開催 @緑丘会館)

『2007 ワールドカップ カーワン JAPAN スく戦えリ』
ー 同行取材の朝日新聞 中川記者、スポーツライター永田氏が熱く語る ー

=====

中川 文如（なかがわ ふみゆき）氏

- ・ 1975 年東京都生まれ。
- ・ 朝日新聞記者。東京編集局スポーツグループ勤務。
- ・ 98 年入社。盛岡支局、北海道報道部、西部報道センターを経て現職。
- ・ 西部報道センター時代の 2003 年からラグビーの取材を始め、06 年 4 月の東京転勤とともに本格的にラグビーを担当。
- ・ 早大学院と早大（大学公認サークル「リスの会」）で選手としてプレー。

永田 洋光（ながた ひろみつ）氏

- ・ 1957 年東京生まれ。横浜市大文理学部卒。
 - ・ フリーランススポーツライター。江戸川大学非常勤講師。
 - ・ 『ラグビーマガジン』誌を中心に、スポーツ新聞や『Number』にもラグビー記事を寄稿。
 - ・ 著書は『日本ラグビー原論』、『日本ラグビー復興計画（宿澤広朗と共著）』、『元木由記雄－桜のプライド』、『勝つことのみが善である－宿澤広朗全戦全勝の哲学』、『勝利がすべてを変える（監修 著者はジョン・カーワン）』など。
- =====



講演中の中川さん（右。話中）と永田さん（左）

<永田洋光>

去年講演させていただいたので、今年は自分が話すことはないと思っていた。朝日新聞の中川さんは今年のジャパンに関してはパシフィックネーションズカップからワールドカップまで全試合を観戦していたので、単独でお話ししていただければいいと思ったのですが、聞き手をやれということなので出てきた。あくまでも聞き手に徹するので、(笑) よろしく願います。(拍手)

今はやっていないが、昔「ラグビー狂会」の危ない本で、たしか小藪さんが監督の時のジャパンをかなりぼろくそに書いた。そのときに非常におもしろい読者カードを送ってくれた高校生が中川さん。「この本を読んで思わず腹筋をしました」と書いてあった。たぶん観戦歴やラグビーをみる目は非常にしっかりしているのではないか。

今回ワールドカップでずっといっしょに取材し、時には彼のホテルに転がり込んで泊めてもらうなどのつきあいをしてきた。すごくいいところをみていると思うところがある。今日はいろいろおもしろい話が聞けるとおもいます。(拍手)

<中川文如>

なぜ私がこの場に呼んでいただけたのか、というのはひとえに長い時間ジョン・カーワンのジャパンを見てきたということにつくるのかと思います。カーワン体制には、去年の10月以来、アドバイザーの時から公式戦はすべてカバーしてきた。今回のワールドカップも、事前のイタリア合宿から2ヶ月半ちかく、イタリア、フランス、ウェールズと帯同し、日本のメディアではもう一人フリーの方と私とが最長取材。長いだけ取り柄だったんですが、ずっと取材し続ける機会に恵まれた。

南アフリカのワールドカップのときは学生だったが、アルバイトでお金を貯めて見に行った。ラグビーが大好きであるというご縁があって呼んでいただけたものと思う。今日はよろしく願います。(拍手)

■ジャパンは進歩したか？

<永田>

「斯く戦えり」というタイトルなので、当然ジャパンの話をうかがう。去年の11月にワールドカップ出場を決めて、カーワンにはなにかやってくれそうだという期待があり、それが今年になって、このメンバーでいいのかという話もあった。

去年の香港で戦ったときと春先とではどう違うか？進歩していたか？それとも？

<中川>

いろいろな見方があると思うが、進歩したかと聞かれれば明らかに進歩していた。

<永田>

どのへんが？

<中川>

チームとしてやろうとしていたことは、結局勝てなかったんでできなかった。ただ、やろうとしていることをやろうと一生懸命努力していた。

去年の 11 月はカーワン体制といっても付け焼き刃。ラックにしてもディフェンスシステムにしても。でもチームになろうとしていたという意味では進歩していた。

<永田>

2 チーム制を聞いたときはどうだった？

<中川>

前々からそういう話は漏れていたもので、うすうす予想はしていた。

我々メディアというものは、情報は小出しにしていくのが好きな人種だが、国内最終合宿の初日に、いきなりカーワンがチームに分けていくとあっさりと言われてしまったので、拍子抜けというか、やっぱりきたかという感じだった。

<永田>

2 チーム制についてはどう思った？

<中川>

私は賛成のほう。いろいろな見方があるとは思いますが、今の日本ラグビーがおかれている現状を見たときに、今回のワールドカップは結果を残さなければならぬ。どんなに内容が濃くても、社会に与えるインパクトが何も残らないのではないかという危機感を抱いていた。

現実的にはオーストラリアにはどんなメンバーでやっても勝てるわけはないわけで、そういう意味では 2 チーム制には意味があると。

<永田>

チームの分け方も紆余曲折があった。大畑のアクシデントがなくて、当初予定していた AB チームだったら、これはけっこうおもしろかったのではないかというのが私の考えだが、そのへんどう？

<中川>

当初予定といっても、アレジや立川あたりまでさかのぼるのであれば（笑）…かなり戦えていたと思う。

カーワンが 2 月の時点でスコッドを 50 人に絞って、それが最後悪い面が出てしまったが、それを鍛えていた。そのままいけば少なくとも 95 点は取られることはなかったと。

■ウェールズ戦で示されたこと

<永田>

ワールドカップの 4 試合は、期待値を上回っていたか？

＜中川＞

かなり期待を込めていたので、その意味では残念だったが、所詮 1 年に満たない強化ではやむを得ないなと。

＜永田＞

どの試合がジャパンらしいというか、感情移入できた？

＜中川＞

結果を見ると、フィジー、カナダとは競った、印象に残る試合ではあったが、私としてはウェールズ戦がいろいろな意味でいちばん印象に残った。

＜永田＞

前半立ち上がりはよかった。終わったときはぼろぼろ。そのどの辺が？

＜中川＞

大きい言い方だが、世界にジャパンの存在価値を示すには、フィジーやカナダではなく、ウェールズのレベルに勝つということだろうという前提が自分の中にある。

最初に大西のキックで先制して、遠藤のすごくいいトライがあった。あのときは私も我を忘れて大声を出していたがそれが甘かったかも。これはもしかしたらいけるかなと思いつつも、終わってみたらやっぱりという結果で。やればできるじゃないかという部分と、世界との差はさらに離れているといったなという現実を両方見せられてしまった。

＜永田＞

あの試合は私も実は、ウェールズの空気がよくないと感じた。レベルは違うが、99 年大会でニュージーランドがフランスに負けたときの戦前の雰囲気と似たようなものを感じた。相手を見下して先のことばかり考えていて今日の試合に集中していないようなムードが見て取れた。これはひょっとしていくのではないかと思って、カーディフのブックメーカーで、日本のトライ 3 人、日本の勝利、先制点は日本のキックと 5 つ賭けて、結局最後のひとつで元をとった。(笑) そういう空気が漂っていた。ここにいる大友信彦記者もそう感じたと思うが…

＜大友信彦＞

はずしました。(笑)

＜永田＞

大友さんはどのへんがいけそうだった？

＜大友＞

おっしゃるとおり、街の人も、メディアの雰囲気も、この相手のことは飛び越して先を見ていた。ウェールズは 99 年の大会でサモアと当たった、あの日の雰囲気に似ていた。サモアに勝ってテストマッチ新記録の 11 連勝だとかそういうことばかり新聞に載っていた。今日でシェーン・ウィリアムスが何十キャップで何十トライだとかいって、そんな記事ばかり。ああこれは同じだなと。これは絶対いけると。

試合の流れも、ウェールズはつまらないミスが多くて、きたなと思っていたが…

<永田>

前半の 20 分は非常にいいムード。それが逆に破綻していった原因になったのではという気もする。

なぜ破綻したのかというあたりはどう？

<中川>

ゲームの流れで見ると、前半の終わりにゲームを切っていればそこで終わってるところを、不用意なキックからトライをされて点差を広げられてしまった。あのトライで流れが変わった。

もうひとつは、地力の部分で、二十何分しか戦えない。最初にとられたトライが、ゲームを切るべきところで切れていないところから始まっている。吉田朋生のキックがノータッチになって…

<永田>

チャージして、ウェールズのオフサイドにいる選手が突然オンサイドになって…

<中川>

中途半端なチャージ。試合後のミックスゾーンで、誰のチャージかわからなかったので大野選手に聞いたら、あれ僕ですと下を向いていわれた。

ミスがことごとく失点につながっているということが大きかった。序盤はミスが少なかったのに。

<永田>

ウェールズ戦の前がフィジー戦。敗れたとはいえ、がんばってはいた。

中川さんの記事で印象深いのは、直前にけが人が出たときに、FB にトヨタの久住を呼んだが、これはカーワンが日本の選手を掌握していないのではないかと書かれていた。

やっぱりそういうところが一年間の底の浅さというか、馬脚を現してしまったかというところ。フィジーまでは AB と分けて、ウェールズにはベストメンバーでいく…。私個人としては層が薄いなと痛感したが。

<中川>

私も何度か書いたが、久住の招集は、カーワンがもう匙を投げたというくらい。

最初 50 人に絞って、これを鍛えるぞとなったときに、けが人が続出。そして最後に久住を招集。

なぜ久住に決めたかと聞くと、トップリーグ各チームに電話して得た情報「久住が調子いい」とそれだけの理由だと。

11 月就任で、2 月にスコッドを決めなくてはならなかったのは、厳しかったというコメントがあったが、底が浅かった。

■「戦う集団」にはなっていた

＜永田＞

欠点ばかりではいけないので、今回4試合を通じて、ポジティブな面は？

＜中川＞

精神論かといわれてしまうのを承知でいう。チームがひとつにまとまっていた。戦う集団になっていたということ。

＜永田＞

もうちょっと具体的にいうと？

＜中川＞

選手たちがカーワンのために、カーワンを男にしようと、カナダ戦の前に箕内がいったという。日本協会の責任が大きいと思うが、ジャパンは理論よりも求心力を求めている。

俺についてこいの指導。ときに高校、大学のような絞りをやる。ボールを使ったコンビネーションでミスが多くなると、ボールを遠くに蹴っぽって、あれをセービングしてもう一回やり直せという場面もあった。

そういう面を選手たちも実は求めているのかもしれないという気がする。

＜永田＞

エリサルド体制で「何を言われているのかわからない」状態から、自分たちが高校時代に経験した「根性ラグビーに戻れ」みたいな感じになると、やっぱり生理的にしっくりくるのかな、という気はすごくした。

他には印象に残った練習は？

＜中川＞

春合宿の初日かな、フィットネス系のサーキットトレーニングがあったが、ラインをしっかりまたがないで戻ってくる者に「はいやり直し」。

＜永田＞

ありましたね、7分走。

＜中川＞

そうそう、セブンミニッツトレーニングとかいっていた。

＜永田＞

たぶん皆さんあれをご覧になったら、とくにチームの指導をする方ならぜひやってみようと思うような、自分が選手だったら絶対いやだと思うような、非常に厳しい練習。

＜中川＞

ジャパンがやっていた練習には、これ日本の高校生にやらせたらいいのにな、というメニューが多かった。

＜永田＞

それはたしかに。非公開練習は見なかった？

＜中川＞

ちらっと見たが、大会に入ってからやはり相手を意識した実戦的なものに

終始していた感じ。

<永田>

イタリアの合宿は？

<中川>

これが時間を無駄にしたなと思った。最初の1週間は練習になっていなかった。時差ぼけとか暑さだとか、外から見てみると、なにこの期に及んで言い訳してるのという感じ。

内容的には2チームに分けて、アタック&ディフェンス。しかし実が伴っていない。イタリアとのテストマッチは最初は眠って後半ようやく起きたようなゲーム。ああいう流れがイタリア合宿全体をとおしてあった。最初寝ていて、起きたと思ったらみんなけがしちゃった、という。

■欲しい「力の『絶対値』」

<永田>

ちょうど大会期間中、たしかカナダ戦の前あたりに記者が食事をしたときに論争になった。たとえばフッカーの松原選手が大会に入ってから10kgやせたという情報がチームサイドから流れてきて、ロックの大野選手も4~5kgやせたとか。それだけ大会が厳しいということなのだろうが、それでいいのかと。FWの選手がどんなに厳しい状況にあっても、それは異常なのではないか、弱すぎるのではないかと。

<中川>

大野選手も1試合で、6~8kgやせたとか。

<永田>

これはまったく個人的見解だが、日本の選手はご飯を食べないと力が出ないとか体重が落ちるとかいうが、アルゼンチンの選手などを見ていると、こいつら1週間フィッシュ&チップスだけ食べていても、ラグビーをやって十分に体重を増やして帰って行くのではないかと思う。東芝前監督の薫田氏が体幹の強さと言っていたが、体幹というよりも内臓の強さを感じた。そこへくると日本代表はひ弱かなと。

<中川>

これを言い出すと元も子もないが、選手としてもチームとしても別の部分、地力の部分が足りなかったのではないかと。使うべき4年のうち、3年を無駄にしている。それがどうやっても、仮にエディー・ジョーンズが来たとしても厳しいものがあるなという思いが日に日に深まっていた。

<永田>

去年の香港でもビール飲んで言っていた。

<中川>

韓国戦のあと永田さんと、これが1年か2年前だったらと。

<永田>

ワールドカップを考えると、4年間の強化をどうするか。強化の的をどう絞るか。そういうスキームというか、全体の構図をどう作るかというのが、どのチームにとっても大事なのかなと今回感じた。

＜中川＞

4年じゃ短いぐらいに、競技レベルが向上していて、たとえばアルゼンチンにしても、ロフレダ監督は2回目だったか、そのぐらいの時間をかけて強化をしている。

じゃイングランドはなんだったのか、といわれると困るが。

＜永田＞

困っちゃう。

＜中川＞

私はウィルキンソンのチームが8年続いたという解釈。

＜永田＞

私はものすごく期待してサンドニで予選リーグのイングランドと南アを観たが、ふざけるなど。タックルしないし。それが、ああ変わってしまう。それは中川さんが言われた地力の部分。ウィルキンソンが入って、こう戦うと決まった瞬間に、南アとああいう試合ができるし、オーストラリアに勝ち、フランスに勝ちということができてしまう。そのへんの集中したときの力の出方の絶対値がとてつもなく大きい。

＜中川＞

イングランドは地力というか芯のようなものがしっかりしているから、ウィルキンソンが帰ってきたら、ああ俺たちはこういうことをすればいいとなる。日本にはそういう思い出せるものがない。決勝の南アでもそれがいえるのではないか。

■カナダ戦をどう見たか

＜永田＞

決勝については後で改めて聞く。日本は最後にカナダと引き分け、日本テレビの不手際は現地でけっこう笑ったが、あの試合はどう見たか？

私は個人的にはよかったね、と思ったが、勝てよこのぐらいの試合っていうのが正直なところだったが。

＜中川＞

たぶんずっとあのチームを取材していなければ、最後に大西がキックを決めたときに、彼らがものすごく喜んでいたところをみたら、怒りがこみ上げてきたと思う。カナダだと。やっとの思いで引き分けて何を喜んでいるのかと。

しかし、ずっと取材をしてきた者としては、いろいろなことがわかっていて。それまでの借金の大きさ、ずっと勝てないできて、2勝という目標を掲げたものの、1勝もおこがましい状況だったのだなと。ほんとうに1歩ずつ、半

歩ずつ、勝ち点をとることから始めなければいけないという現実もある。選手の喜んでる姿に同情できる自分もあった。

ただ、1時間後ぐらいに、選手の取材をするころには、選手の表情も複雑だった。満足している選手がいる反面、悔しがっている選手もいた。それが翌日の朝ホテルに取材に行くと、悔しがっている選手の割合が増えていた。たぶん、日本に帰ってきてからさらにその率は増えたと思う。

本当は悔しがらなくてはいけないのに、あぁなってしまった。

＜永田＞

ワールドカップ最終戦で勝つか負けるかという興味があったから皆さん見ていたと思うが、ぜんぜん知らない者が見たらつまらない試合だった。

＜中川＞

大凡戦。

＜永田＞

タッチキックは真横にしかでないしみたいな、だったと思うんだけど。たしかに現地にいて、最後に大西がねらうときに、小野澤を除く13人がハーフウェイにならんで、サッカーのPK戦のように、終わってからわーっと駆け寄っていったというあの気持ちはわからなくはないというのはあったが。

大友信彦記者にもジャパンの総括を…

＜大友＞

僕はちょっと感じ方が違う。カナダ戦、でかいだけ、パワーだけ、でもでかさとパワーだけはものすごくあるという相手に対して、あれだけゴール前を守った日本は初めて見た。それだけでもかなりの進歩があったのではないかと思った。

こちらは中4日、相手は中8日。これは壊滅するスケジュールだった。サイズの差があった、向こうにはヨーロッパでプレーしている選手もいた、そういう中で、ゴール前のモールも守って、インゴールに入ったキャプテンを箕内選手がひっくり返してボールをこぼれさせて、そういうひとつひとつの場面には鳥肌立つものがあった。しかし第三者としてみれば退屈だったのは、中川さん永田さんと同じ。半分当事者としては、すごく限界状況でやっているなど。

それはカーワンがチームにつぎ込んだことも多々あっただろうし、これは箕内キャプテンが再々言っているように、ジャパンのコーチングスタッフは何度も変わったが、トップリーグで自分たちはタフになったと。それは彼らがカナダ戦で実証して見せた。

いいものを見せてもらったという気持ちはあるが、同点になるちょっと前の36分、正面のペナルティーを得て、7点差があって、勝ちたいのならなぜねらわないのかと思った。小野澤が同じことを試合中叫んでいた。狙え狙えと。3点取って、5点取れば勝ち。そういう気概を小野澤はもっていた。しかし

箕内は退いていた。そういう指示をできる人間がいなかった。JK がしっかりしたものを与えられなかったのか、そういう熟成が足りなかったのか。もちろんがっかりしたところは多々あったが、現状のおかれた状況の中ではよくやってくれたという思いの方が僕は強い。

でもチームとしては勝たなければな。

＜永田＞

たしかにゴール前 5m のモールラックからはあまりトライはとられなくなった。しかし、距離のあるカウンターアタックからは意外と簡単にトライをとられたりした。ラグビーは難しいなと感じた。

＜中川＞

秩序ある状況のディフェンスはかなり練り込まれていたといえる。逆に攻めていてちょっとミスが出てとられてしまう、そういう対応力のなさが決定的に出た。

＜永田＞

ウェールズ戦でも、むこうの SH が、ちょうど日本が開いた内側に入り込んできたらそれだけでディフェンスが崩壊していた。

■「世界との差」を噛みしめる

＜永田＞

はじめて記者という立場でワールドカップで日本代表に接していてどうだったか？ 冷静だった？ 熱くなった？

＜中川＞

今回は締め切りに追われている状態で試合を観るということがほとんどなかった。通常だと試合が終わらない内から原稿を書かなければならないときもあるが、時差の関係で試合後に取材をして、時間をおいてから原稿を書いていた。そういうサイクルになっていて、試合のときは熱く観て終わったら冷静になって、ちょっと頭を冷やそうというスタンスだった。

勝ったら熱さを引きずっていただろうが、結果が結果だけに試合のあとまでということにはなかった。私の中では 95 年の吉田義人の走りのほうが感動した。

＜永田＞

あのアイルランド戦のバックアップ…

というあたりはみんなでも話していたが、これがまた準々決勝以降になると日本人記者も減ってきて、私も滞在費がかかるので、2 度往復した方が安上がりということでそうしたのだが、冗談で「これでジャパンカップが終わってワールドカップが始まる」とか言っていたが、見る目が変わるというようなことはあったか？

＜中川＞

これからは世界のラグビーをしっかりと観るかみたいなところがあって、たし

かに見る目は変わった。ジャパンの目線で観ていたものが、世界のラグビーへと。

＜永田＞

カナダ戦が終わってから、アルゼンチン対アイルランド、トンガ対南アとか、おもしろい試合があった。まるでジャパンの記憶が洗い流されてしまうような印象があった。

＜中川＞

ジャパンがワールドカップを戦っていたのが何年前かのような感覚。イングランド、トンガ、アルゼンチン、アイルランド、ウェールズ、フィジー…

＜永田＞

準々決勝、フランス、ニュージーランド、イングランド、オーストラリア、フィジー、南アフリカ、アルゼンチン、スコットランド。順当といえるのがアルゼンチンとスコットランドぐらいで、あとは波乱があった。ご覧になってどう思われたか？

＜中川＞

世界の上の方はレベルがどんどん高くなっているのだが、差が詰まっているという感じ。

＜永田＞

フィジーは？

＜中川＞

あの日はアルゼンチン対スコットランド取材していたので、フィジーはテレビ観戦だった。

＜永田＞

よくフィジーが日本とやって4点差。そのフィジーが最後はあそこまでいった。では日本は…という言い方をするが、実際のところはどう見えたか？そのフィジーをどうとらえたらいいのか？

日本の手の届くところにありながら、なおかつウェールズを食う力もある。これをどう考えたらいいのか？

＜中川＞

手の届くところにあると思いつけることは必要だろう。しかし先ほどの3段論法はかなり危険。日本は2チーム制で、ある意味フィジー戦がピーク。しかし向こうにしてみればジャパン戦はただの初戦。あれからどんどん進化した。フィジーでもうひとつ重要なのは「フィジーのラグビー」をしていたということ。大会総括でも「フィジーだけはフィジーだった」とされている。そこはよく考えるべきだ。

＜永田＞

スタイルといえば、アルゼンチンだとけっこう皆感情移入できるが、同じような内容でもイングランドだとシラーツとする。これはなんなのか。戦法の画一化といっても微細な違いがあるのか、今回はキックを使うのが特徴的だ

ったが、ひとつの大きな流れに収れんされていくのか？

＜中川＞

アルゼンチンというチーム、日本からすればうらやましい体格の持ち主たちが、タックルでは足首に突き刺さっていく。そのへんが共感を呼ぶか、シラ—ットとなるかを分けているのかもしれない。

＜永田＞

同じようであっても、ひとつひとつのディーテイルが共感をよぶかどうかというところがあった。そういう点では、ジャパンが帰ったあと、個人的に肩入れしていたチームはあったか？

＜中川＞

私はアルゼンチンは応援していた。選手としてはウィルキンソンにすごく注目していた。なにかこう哀愁を漂わせる雰囲気には惹かれた。

＜永田＞

2003 年とは全然違う？

＜中川＞

あのときは先輩の大きな FW に引っ張られていた。大学でいえば 1、2 年生。今回は 4 年生。俺がやらなければいけないという状況に追い込まれ、疲れているが、俺がやらないとイングランドは勝てないしな、とか思ってやっている姿を勝手に描いて人間ドラマを感じた。

＜永田＞

たしかにドラマチックという点では、アルゼンチンとウィルキンソンは突出していた。

逆にニュージーランドやオーストラリアは早々に負けてしまったが、あの 2 チームについてはどう？

＜中川＞

ニュージーランドはいい意味でも悪い意味でも強すぎた。その点今年の早稲田と似たものを感じていた。接戦の経験がない。勝負所でタイトなキッキングゲームをしなくてはならないところなのにそういうゲームをやってこなかった。しかもリーダーがいなかった。

フランス対ニュージーランド戦を見た後のカーワンに取材する機会があったが、ベテランを使わなかったことに納得がいかないという言い方をしていた。それは一理あるなど。

■「人間の内面」を見た大会

＜永田＞

そろそろ時間。まとめに入ろう。8 試合のうち、すべてを見られるわけではないが、一番印象に残ったゲームは？

＜中川＞

開幕戦。アルゼンチンが泣きながら、スタッフまで肩を組んで国歌を歌う。

ラグビーの良さを彼らが一気に発散していて、ワールドカップがこれから始まるんだよと観衆を引き込んだ。そして蓋をあけたらああいう試合。そういう点で、ベストゲームはと聞かれれば、私は開幕戦だ。

<永田>

決勝戦はみな点が辛かった。イングランドと南アの決勝をおもしろいと現地で言った記者は私一人だけで、みんな退屈だとか、なんだこの試合は、とか言われて非常に困った。

それはおいておくとして、今回のワールドカップはラグビーのエモーショナルな部分、気合とか、集中力だとか、涙流して国歌を歌うとか、今まではそれほど大きなものではなく、味付け程度にしかとらえられなかったものが、今回はもろに前面に出てきたような印象を受けたがどうか？

<中川>

まったく同感。戦術的には発見やひらめきは全くなかったと思う。感情的な人間の内面、ウィルキンソンしかり、アルゼンチンしかり、イングランドは決勝で尽き果てたが。

ジャパンはその部分ではけっこういい線行っていたかもしれないが、その前提の部分があまりになさ過ぎた。

<永田>

では 2011 年に向けて。

ちょうど IRB から、16 カ国開催が噂されていたのが、20 カ国開催の方向に進んだというニュースが入ってきたが、では 20 カ国になったところで、ジャパンはどうすればいいの、というところから。

<中川>

まずは地道に 1 勝をめざすべし。そして 1 年 1 年の積み重ねになっていくので、カーワンには来年までの契約が残っているので、ここはしっかりシビアな目で見ていく必要があるだろう。

<永田>

シビアな目とは？

<中川>

今年はある意味で時間的な言い訳ができた。もちろん選手を見て行かなくてはいけないが、カーワンに選手を 1 年託すのかどうか。とくにハーフ団の構築と、アタックの部分をシビアに見て行かなくてはいけないのではないかな。

<永田>

日本らしいアタックができるかどうかということですね。どうもありがとうございました。（拍手）

■再び「本当に強くなったのか？」

<司会>

中川さん、永田さん、貴重なお話どうもありがとうございました。

まだ若干時間があるので、なにかご質問があれば…

<質問>

本当にジャパンは強くなったんですかね？

僕はどんどん離されていっていると思う。体格は大きくなったが、連中と近くなってきたのかもしれないが、ジャパンらしさがない。昔だったら、とにかくかき回してやろうとか、弱いという自覚があるからいろいろと作戦を考えてやっていたと思う。一番強かったのは、オールブラックスジュニアに勝った、今日は水谷さんが見えたが、あのときではないかと思う。勝とうとする根性という部分が、今のジャパンにあるのかなと。

向井さんに以前ここで講演していただいたが、ニュージーランドで合宿をやることになったときに、ある中堅選手が「(往復の飛行機は) ビジネス(クラス)ですよ」。向井さんは「このやろう」と。おまえらがちゃんとやればそのぐらい協会に掛け合う腹はあると。向井さんは「こいつら走ってない」を思っていた。帰りの飛行機の中で「今年の合宿はきつかったね」だと。

きつくない合宿ってあるのか？ 日本の中ではトップクラスかもしれないが、世界の中ではどうなのかという気がするがそのへんはどうか？ 世界のトップに近づいているのか？ 遠ざかっているのではないかという気がするが、率直な感想をお聞きたい。

<中川>

遠ざかっているのだと思う。(笑) 日本はこの1年巻き返したが、世界はそれ以上に進んでいる。日本らしさという話がでたが、我々が知っている、それこそ水谷さんのころの古きよきジャパンのスタイルは、今の選手はほとんどできないと思う。「すれ違いざまのパス」というシチュエーションはトップリーグでもほとんど見たことがない。普段の試合でやっていないのにジャパンになったらできるかというところできるわけない。

<永田>

おなじような感じだが、たとえば68年にオールブラックスジュニアに勝ったときは、仕込みというか、準備がすごくうまくいったと思う。ワールドカップに関しては、日本という国はデジタルで、大会が終わると監督が替わってゼロからスタート、次の大会が終わるとまたゼロからという、4年間の強化が加算されていかない中で、日本的なるものを追求するのは非常に難しいのかなと感じる。

もう少し全体で青写真をしっかり描いて、実現のために逆算してどうやっていくのかをみんなで考えないと、今のような質問はずっと出てくる。

相手に奇襲をかけるような試合が日本の最高到達点であるという話がいつまでも語り継がれてしまうので、この辺はがんばって変えてもらいたいなという気がする。

<大友>

先ほどニュージーランドが負けた試合についてカーワンが、あれはベテラン

を使わなかったことに納得いかないと言ったそうだが、中川さんは、彼がジャパンでベテランを使わなかったことについての質問はしなかったのか。

＜中川＞

そのときはカーワンに朝食をごちそうしてもらっていたので。(笑) でも、彼もワールドカップの決勝トーナメントを見ていてちょっと考え方を変えたみたいで(今はどうなっているかわからないが)、カナダ戦の直後は思いっきり世代交代をはかると言っていたが、ワールドカップでベテランの底力、経験のなせる技を目の当たりにしていたらしく、決勝の前々日にインタビューしたら「徐々に世代交代をはかる。来年はきっちりベテランの力を使わせてもらう」と。自己否定はしていないが、あ、この人ちょっと考え方を変えているなど。スタンドオフは小野だと言っていましたけど。(笑)

＜大友＞

貴重なお話ありがとうございました。

＜司会＞

そろそろ時間です。本日はありがとうございました。盛大な拍手を。(拍手)

(文責：帯広 OB 小林誠)

各大学投稿

東京マラソン2008（10km）に参加して

北大 昭和55年卒 川端亮二

2度の骨折でラグビーから縁遠くなったため、運動不足解消の手段として最近はお金がかからず手軽にできるジョギング、ウォーキングを始めた。メタボ対策が第一であるが、走った後のビールで腹回りは、微増傾向にある。特に、夏場のビールは最高である。フルマラソンは厳しいが、10kmくらいならいけると思い、東京マラソン2008へ応募したところ、運良く当選した。当選の連絡があった昨年10月頃は、自己記録（8年前に10km55分くらいで走った記憶があるが）を更新しようと考えたが、冬になるにつれて寒さに負けて走る回数が、すっかり減り目標は10km完走となってしまった。

昨年の大会は雨模様であつたらしいが、今年は快晴。気持ち良く東京の街を走ることが出来た。10kmは、新宿都庁から日比谷公園までのコース。当日は余裕をみて、出かけたが電車に乗っているとそれらしいランナーが続々と乗車。都庁に着くと着替え、荷物を預けた後、スタートを待つまでが、結構長くすっかり体が冷え切ってしまった。9時前頃からスタートのセレモニー、都知事の挨拶などが行われ、9時10分にスタート。小生は比較的スタート地点に近かったので、スタート地点までは7分程度ですんだ。スタート地点では、都知事がランナーに手を振っていたが、こちらでも手を振り返り。スタート後は芋洗い状態で、なかなか人波を抜いて前へ出て行くのは難しい状態。靖国通りは全体の流れに合わせてゆっくりしたペース。5km地点が飯田橋辺りで、給水所もありスポーツドリンクを補給。勤め先がちょうどこの辺りの外堀通り沿いにあり、いつもは歩道を歩いて通勤しているが、車道を走るのは初めてだが、広々していて気持ちが良いものだ。

飯田橋を過ぎて右折し目白通りへ。九段下、竹橋を經由し内堀通りを走り、ゴールの日比谷公園までは、体も温まっていいペース走れ、あっという間であつた。マラソンや駅伝の選手が「沿道の人々の応援に励まされた」とコメントすることが多いが、実際そのとおりで、見ず知らずの人に「がんばって」（特に若い女性に）と声を掛けられると、多少疲れていてもいいところを見せよ

うと頑張ってしまうものである。記録的には不本意（ネットで1時間25秒）な結果であったが、来年も参加したいと思う。最近は市民ランナーが多く、大会も色々なところで開催されているので、その気になれば結構楽しめる機会は多い。適度な運動と、適度な飲酒が維持できるよう身体を動かす努力は続けたい。



（スタート前 筆者は右）

中年ラグーマン誕生秘話

東北大学 昭和 62 年卒
北嶋 知樹

卒業年を記載するとき、昭和 62 年とすべきか 63 年とすべきか迷うのであるが、ラグビー部 4 年目が昭和 61 年度であったので、他大学のラグビー関係の方には昭和 62 年卒と自己紹介することにしている。平成 20 年 4 月現在、44 歳の中年（初老？）ラグーマンである。

と、胸を張れるほど、実はそんなに精力的に活動している訳ではない。つい 1 年ほど前まで、ラグビーとはほとんど縁のない生活を送っていた。それというのも故鈴木賢次郎さん（東北大 OB）の追悼試合として行われた学士ラグー倶楽部対不惑倶楽部の試合（平成 11 年 6 月）に出場したはいいが、その際、左手人差し指を骨折、それで両親や妻の猛反対があり、一度、楯円球から完全に足を洗ったからである。生来怠惰なため、以後、殆ど運動をしない生活となってしまった。一旦グラウンドから遠ざかると、その間に歳もととり、気力・体力の低下、体重の大幅増加（メタボ症候群？）さらには腰痛、首痛などの症状が次々と現れる。八（六）大学の案内が来ると、ちょっと心動かされはしたものの、妻の反対もあり、また「今の体力では、とてもラグビーは無理」とも思っていたので、ずうっと八大学 OB 大会には出場しなかった。数年前に秩父宮で催された時も顔を出さなかったほどである。

多少変化が生じてきたのは、2 年ほど前のことだろうか。4 年前に息子（現在、小学 3 年生）を田園ラグビースクールに入校させたのだが、その練習や試合を見ているうちに、「またラグビーをしてみたいなあ」という気持ちが徐々に高まってきた。しかし、もはや年齢的・体力的に無理だと思っていたので、行動には移さなかった。

しかし、賢次郎さんの後を次いで就任した、学士ラグー倶楽部の東北大担当幹事の立場は、一応そのままであった。ちなみに学士ラグー倶楽部とは旧帝国大学ラグビー部 OB をメンバーとする日本最古（YCAC を除く）のクラブチームである。今年は創立 80 周年を迎える。おとし（平成 18 年）の暮、その学士ラグーの幹事会に数年ぶりに出席した時に、試合の常連メンバーが昔とあまり変わっていないことを知り、さらに心が動き始めた。それで、そのすぐ後に行われた某クラブチームとの試合に、人数が足りないというので、思い切って出てみることにしたのである。本職は CTB だがコンタクトが怖いので SO での出場である。とにかく怪我をしないことだけを考えていた。ところが、である。最初は恐る恐るであったものの、意外や自分としては思っていた以上に動けた気がしたのだ。試合も勝って、久しぶりにスカッとした気分になった。それがきっかけで、その後、ちよくちよくグラウ

ンドに足を運ぶようになった。妻の反対に対しては、「ラグビーじゃないと運動する気になれない。健康のためだ。それに同年代の人と試合をするのだから大丈夫」と屁理屈？を言って、何とか説き伏せた。息子をラグビースクールに入れていた効果もあったかと思う。

しかし長年のブランクの影響はやはり少なくない。ラグビーから完全に離れる前の数年間も、せいぜい年間2～3試合に出場する程度だったのだ。会社のラグビー部（当時関東社会人2部）を引退したのが平成3年だから、実質的ブランクは15年を超える。最近では息子が使う子供用のボールに慣れていたのも、最初は「大人用のラグビーボールはこんなに大きかったか」と驚き、パスも途中で失速してしまう状態であった。ある程度、ボールに慣れてくると、なんとか普通のパスは届くようになったが、飛ばしパスは思うように行かない。今の若い選手のような華麗なスピンプスはできないので、長いパスは腰で投げるのだが、足腰が弱くなっているのであろう。キックも伸びない。もともとキック力など無かったのだが、今の「飛ばなさ」は尋常ではない。昔は好きだったタックルやコンタクトは怖くなった。怪我をしたらどうしようかと思う。実際、二週間前の試合で強打した左肋骨の痛みは未だ癒えない。肉離れも既に2回もやってしまった。ルールも昔と大きく違う。以前は明らかに反則だったプレーが今は認められているのだ。そんなとまどいも大きい。

そんな状態ながら、この1年間に学士ラガーともう一つのクラブチームを掛け持ちして、かれこれ10試合ほど出場しただろうか。結果、これだけと言える。やはりラグビーは面白い。うまくプレーできずにへこむ回数は以前より格段に多くなったものの、「ここしかない」というタイミングでパスが通せたときの心地よさは以前と変わらない（プロップがスクラムに拘るようにCTBはラストパスに喜びを感じるのだ。もっとも最近のCTBはクラッシュの方か？）

ただ、一つだけ条件がある。実力（特に体力）の接近したチーム同志、年齢構成の近いチーム同志で試合を行うこと。できれば、相手が少し弱いことが望ましい。正直、若い大きなCTBが縦に突っ込んできても、今の私には止められない。試合だとそれでもタックルに行かざるを得ないのだが、吹き飛ばされて怪我をするだけだ。これでは元も子もない。

徐々に身体も慣れてきた。意識して体重を落としたせいか、慢性的だった腰痛も概ね解消した。試合のたびにあちこちが痛くなるものの、適度？に運動することで身体自体は健康体の方向に向かっているようだ。何歳までプレイできるか判らないが、健康維持も兼ねてしばらくはラグビーを続けて行こうと思っている。また、本文を読んで、一人でも多くの中年ラガーマンが出現してくれば、とも思う。

大学統合によって

東京海洋大学 昭和53年卒 吉永辰雄

2003年10月東京水産大学と東京商船大学は統合され、東京海洋大学として新たな船出をしました。ラグビー部も翌年3月より統合し、東京海洋大学ラグビー部として活動を開始しました。

もともと両校は、戦前越中島（現海洋大越中島キャンパス）で隣り同士であった関係から、学校対抗の定期戦を全校を挙げて行っており、その歴史は50年以上前に遡ります。ラグビー部もその勝敗に一喜一憂してきた間柄であり、今も自分達の時代の戦績を気にし合うライバル関係であります。

今回の統合は長年の好敵手を失うという寂しさもありますが、好敵手と一緒にあって、更に強い相手に立ち向かえるという喜びもあります。昨今のラグビー人口の減少は、高校ラグビー界において10人制チーム又は複数チームを一緒にした合同チームでのプレー等を余儀なくされています。水産大、商船大共に単科大学特有の現象である、学生数の絶対的少なさから来る部員の少なさという問題を、この統合が解決してくれることを期待しています。

やはりラグビーは、多い人数で練習を行わないと強くなれませんし、楽しくありません。その意味で、この統合が $1 + 1 = 2$ 以上の成果を上げることが全てのOBが期待しています。

2008年3月には、東京海洋大学入学の初めての卒業生が出ることに伴い、両校のラグビー部OB会組織も統合しました。両OB会とも60年以上の歴史を有していますが、現役チームあつてのOB会組織であり、またOB会組織の強化が現役チーム強化に繋がるとの認識から、多数のOBの賛同を得て統合化されました。本年の第20回8大学OBラグビー大会には、新生OB会として参加しますので、今まで以上に海の男のラグビーを見せたいと参加者一同張り切っていますのでご期待ください。

以上

48歳でのラグビーとの新たな出会い

小樽商科大学（S49年卒）：中島文雄

私とラグビーとの付き合いは大学からです。中学・高校ではバスケットボール部でした。出身が静岡県（磐田市）の為、ラグビーには縁がなく（高校にはラグビー部は無かった。一部の工業高校あるだけでラグビーはマイナーなスポーツでした）まさかラグビーに入部するとは？ 自分でもビックリしています。バスケットをやっていた為、接触プレーが苦手で最初は苦労しました。特にタックルが苦手で、するのもしられるのも嫌でした。その後、ラグビーの魅力に憑かれ大学4年間と社会人の1年間の計5年間プレー。その後は転勤が多く、六大学定期戦（その後八大学）にも参加する事は少なかった事を記憶しています。（時間が許す限りは参加）

2回目の東京転勤を機に先輩の所属している小金井ラグビースクールに参加してラグビーと再会したのは48歳の時です。その後は毎週日曜日はスクール。8大学定期戦には毎回参加しています。8大学幹事会（月に1回の飲み会）にも出席。12月の忘年会・講演会は楽しみです。元全日本監督の故宿沢氏・向井氏・元全日本キャプテンの横井章氏等ラグビーファンなれば憧れの方々と直（じか）に接する事が出来ました。



不惑倶楽部の丸田氏と

8大学の関係で東京水産大学のOB会の水産ラガーにも入れて頂き、試合、そして合宿と忙しく活動致しました。水産（ラガー）ですので蟹・海老・まぐろなど美味しい水産品の付録が必ず付いていまして楽しい限りでした。（勿論、美味しい酒も）そんな中、3年前の大阪転勤に伴い大学の先輩の紹介で大阪惑惑クラブに入部致しました。先輩が東京不惑というチームの所属で関係の深い大阪惑惑クラブでした。処が、全国の不惑クラブの中でも東京不惑及び大阪惑惑は伝統があり強豪で最初の練習でその強さに驚きました。又、試合・練習も毎週、夏には合宿も有りの本格的なクラブでした。しかし、入った以上、弱音は吐けないと毎週参加して身体を慣らして試合に臨みました。遠征試合及びアフターファンクション・合宿・と1年間は全てに参加し06年度の皆勤賞及び宴会部長賞を頂いた次第です。



迷惑倶楽部の下藺氏他と

この2年半の間に、北海道・九州・愛媛・四日市・名古屋・岡山・そして台湾・韓国にまで遠征しました。毎年の海外遠征も楽しみの一つです。試合も秩父宮・花園・博多の森などラグビーのメッカといえる名門競技場で試合が出来る事も魅力です。大学ラグビー部・社会人ラグビー部・少年ラグビースクール・8大学定期戦・水産ラガー・大阪惑惑ラグビーと経験を重ね、ラグビーの魅力・奥深さを知り、そして大勢の方々と知り合いになれて大変幸せです。現在56歳ですが、今後もラグビーとの関係を益々広くしていき日本のラグビーの発展に貢献できればと考えています。

ケガとラグビーの自伝

九州大学（S59 卒） 原 浩

九大に入学して始めたラグビーである。ラグビーには、ケガはつきものであるが、学生時代は、幸いにも複雑骨折や靱帯断裂等の入院加療を伴う大けがはなかった。

私のケガ人生が始まったのは、九大を卒業し、社会人になってからである。以下に私のケガの履歴を紹介する。

- ・ 昭和 61 年 4 月 就職
- ・ 昭和 61 年 5 月 九大 O B V S 水産大 O B 戦で顎骨骨折し、入院（3～4 日）、上顎と下顎をギブス固定（全治 1.5 ヶ月：この間流動食）
【教訓】上下顎骨固定のため、口が開かず、あくびの我慢が一番きつい
飲会の際のつまみは、冷奴（歯と歯の隙間からすすり込む）に限る
- ・ 昭和 62 年 1 月 新宿クラブチーム ガッデムズに入部
- ・ 昭和 62 年 4 月 クラブチームの試合で、2 年連続で顎骨骨折
下顎骨を全身麻酔で手術（抜糸まで 1 週間入院）上下顎骨をギブス固定（全治 2 ヶ月：この間流動食）
【教訓】手術に際し、歯を抜かれ、歯 1 本分の隙間が出来たため、飲会の際のつまみに枝豆が加わる。しかし、ソシヤクできないため、大きな錠剤を飲んでいるようなもので、うまくない
飲会の際のつまみは、冷奴（歯と歯の隙間からすすり込む）に限る
- ☆『上司から、ラグビーをやめろとは言わないが、・・・』と暗にラグビーをやめることを示唆される
- ・ 平成 7 年 7 月 野球の試合で、人生初の左ひじを脱臼
【教訓】脱臼は骨折よりも数倍痛い
- ・ 平成 10 年 4 月 クラブチームの試合で、右肩鎖骨を脱臼骨折、靱帯断裂
全身麻酔で手術（抜糸まで 1 週間入院）、（全治 2 ヶ月：この間、上半身ギブス固定）

【教訓】体がかゆい時、物差しを隙間から入れて、搔くことを覚える

- ・平成18年3月 クラブチームの試合で、左腕橈骨を骨折し、全身麻酔で（抜糸まで1週間入院）し、ボルト&プレートにより固定（全治：1.5ヶ月）

☆『上司から、原君、もうそろそろ年なんだから、自分の骨ばかり折っていないで、公務員として都民のために骨を折ってはどうかと』と指導を受ける

- ・平成19年1月 前年に入れたボルト・プレートを抜くも、医師から、『ボルトの穴が埋まるまで、2ヶ月間ラグビー禁止』の指導を受ける

- ・平成19年4月 クラブチームの試合で、前年受傷した左腕橈骨を再度骨折（抜糸まで1週間入院）し、（全治：6ヶ月）

【教訓】同じ部位を連続して骨折すると中々骨がくっつかない

- ・現在 八大学ラグビーでの試合復帰に向け、クラブチームで練習中

以上がケガとラグビーの自分史です。八大学ラグビー部OBで、俺の怪我の履歴はこんなものじゃないという方がいれば、是非、ご教示をお願い致します。今後のラグビー人生を送る上での糧にしたいと考えています。

秩父宮への道はローマへの道に通じる

帯広畜産大学
緑白クラブ

20周年大会おめでとうございます。この栄誉ある記念大会で幹事校を担当させていただきことに大変な緊張と喜びを禁じ得ません。微力ながらしっかりと幹事校としての役割を果たしてゆきますので、どうかよろしくお願いします。

この20年を振り返ってみますと、すべてが「ラグビーが好き」の言うことに収められます。局面ではいろいろなことがありました。しかし「ラグビーが好き」が課題の解決に繋がり、問題を乗り越えてくることができました。このことが20年の長きにわたる継続の原動力であったと考えています。

幹事校を担当する平成20年には秩父宮ラグビー場で試合をしたいと気持ち先行していました。しかし、そのための施策は全くなく思いのみが大きくありました。月例の幹事会や一水会等で皆様からの支援や助言をいただきながら今日の日にこぎ着けることができました。これは正しくラグビーの至言であります「One for all, All for one」が身近にそして具体的に感じたことはありません。

ローマへの道は中央集権の政治を行うために重要な手段であったし、ローマの文化や設備等を地方に宣伝する材料であったかもしれない。ローマへの道はここを通る人々にとって刺激的で自分の存在を認識する貴重な経験であったでしょう。これを多くの人が踏襲することによっていつしか、ローマは目標や目的に昇華し、道はそれに達する戦略や手段に変化していったと考えたい。そうすると、秩父宮ラグビー場で今日の試合が行えることは「ローマは1日にしてならず」とも重なって、8大学大会に参加するラグビー好きの人々の心の証が花開いたと理解しています。そしてその花は次に繋げ発展するために結実することを期待しています。

帯広畜産大学緑白クラブはできる限りの多くの参加者が集合することを呼びかけて帯広単独で1チームを構成できるまでになりました。これは在京の大部や小林のひたむきな役割遂行があって初めてなし得ました。そこには伊藤様(長崎)や酒井様(小樽)を始めとして8大学に集う皆様の支援があったからこそと心から感謝しています。

今大会の大会長は帯広畜産大学学長の長澤秀行が担当させていただきます。帯広畜産大学は前学長もラグビー部のOBであったが、後任もOBです。キッズラグビースクールのコーチとしても毎週週末は大活躍。ジャージーを購入し、スパイクも新調して大会に備えている。このようなエポックメイキングなこともあり、熾烈なポジション争いをクラブの中で行っています。

帯広と言えば味なパーティの開催。いくつかの食材を提供するために準備中。お楽しみに！

Ready Go!

ビジネスで気づいたラグビー部を強くする方法

名古屋大学 平成十年卒業 門脇 純

私が大学を卒業して十年が経つ。その間、ビジネスで経験を積み、様々なノウハウを学び、ある程度の成果を上げてきた。今、大学時代のラグビー部の活動を振り返ると、未熟だったと思う点も少なくない。そこで、私がビジネス経験を通して気づいた、ラグビー部を強くする方法を二点、僭越ながら述べさせていただきたい。

一つ目は「チーム全体が目的意識を強化する」こと。ビジネスでは、最初に「目的」を考える。会社では、期初に今年達成すべき目的（目標）を掲げ、個々の社員の業務は会社の目的達成のために行うよう位置づけられる。また、社員の行動を目的達成の方向に向けるための工夫がある。売上の目標値と、達成状況を数字で具体的に示すこと。目標値とのギャップを克服するために日々対策をとることなどだ。大学時代、私自身は残念ながら、毎日の練習の中で、年間の目的と一つ一つの練習の意味を常に意識できていたとは言えない。この点を改善できればと思う。

ラグビー部も、期初にチームとしての目的を定めるとよいだろう。漠然と「よい成績を残す」ではなく、どの大学に勝つなど、具体的な目的を立てることが望ましい。そして、目的達成のために必要となるプレーの精度、速さ、筋力などの目標を数値で具体的に示し、現状とのギャップも数値で把握する。日々の練習はこのギャップを克服するためのものと位置づけ、到達状況を毎日把握できるようにする、というようなことを提案したい。

二つ目は「選手個人が判断の精度を上げる」こと。ビジネスでは、大きな意思決定は効果（やリスク）を予測して行われる。また、よりよい意思決定をするために、組織内で様々な角度からの意見を戦わせて議論する。

ラグビーでも、一つ一つのプレーが効果の予測をもとに行われることが理想だ。ただし実際のゲームではそうはいかないので、日々の練習を通してプレーの効果を確認するしかない。練習中にあるプレーについて疑問が生じた場合は、「どうしてそのプレーを選択したのか」、「よりよい選択肢はなかったのか」ということについて議論する習慣をつけるとよい。私の大学時代にも練習中に同様の議論はあったが、ほとんどの場合はキャプテンや上級生からの一方的な指示だった。そうではなく、下級生も含めて全員が自分のプレ

一の意図を説明できることが理想だ。これを習慣とすることが、チーム全体の判断力向上に繋がるだろう。

以上の二点に共通することは「考える力」を伸ばすことだ。国立大学のラグビー部は「考える」ことのできる人材に恵まれている。国立大学はこの利点を活かして、今後も活躍していただくことを願っている。

(ご紹介)

長崎大学経済学部ラグビー部の発足は、八大学『菱』第 11 号 (1999 年号) でご紹介したように昭和 2 年 (1927 年) であるので、本第 19 号 (2007 年号) 時点でちょうど 80 周年を迎えており、そして本号が公開される平成 20 年の八大学ラグビー第 20 回大会はちょうど参加 10 周年となる。

ここに紹介する記事は、私と同期の辻君が今もご健在の復活立役者森剛一先輩 (昭和 23 年卒) を訪ねて当時の思い出を伺い長崎大学経済学部同窓会「瓊林 (けいりん) 会」大阪支部会報『大阪瓊林 95 号 (2008 年 4 月発行)』に掲載する記事を、森先輩、大阪支部、辻君のご了解のもと、そのまま転載するものです。

我がOBに限らず広く八大学の皆様へ我が先輩方のラグビーへの情熱と往時のご苦勞を知って頂き、八大学ラグビーOB会の更なる継続発展を祈ります。尚、往時の写真は私が生れる 6 ヶ月前のものであり、大変感慨深い。

長崎大学経済学部 昭和 45 年 (1970 年) 卒 伊藤 正

西陵ラガー戦後復活劇 — ラグビーへの情熱と勝利への執念 —

長崎大学 学部 18 回 (昭和 45 年) 卒 辻 克彦



戦後復活時の西陵ラガー (昭和 21 年 9 月撮影。森先輩は前列一番右)

手元に一枚のセピア色の写真がある。終戦後間もない昭和21年9月に撮影された西陵ラグビーOBの面々が写っている写真で、当時のキャプテン森剛一先輩（経専41回）からお借りした貴重なものである。ジャージーはバラバラ、普通のシャツを着ている人や上半身裸の人も多い。ストッキングもバラバラで、よく見ると裸足や地下たび履きの人もいる、石ころだらけのグラウンドでラグビーをやったと感心した。しかし、この20名のラグーマンは皆さん凛々しく、いい顔をしている。

終戦後にラグビー部を復活された立役者の森先輩に当時の話をお聞きした。原爆が投下された長崎で、食料も用具もお金もない時代に、若さと時間と終戦後の開放感と何かやりたいと言う情熱の発露として、ラグビーに取り組んだ大先輩達の生き様を会報に残したいと思います。大阪瓊林95号のテーマである「伝えたいこと」に相応しいお話と思います。ラグビー部OBであり、また編集委員として活動している平井駿さん（学20回）に同行をお願いした。

＜ラグビー部復活の原動力＞

私が一番聞きたかったことは、「ラグビー復活の原動力は何か」ということであった。森先輩は静かに答えた。それは「ラグビーへの情熱」であると。時間とエネルギーを持て余した人達が、残っていたラグビーボールを見つけて始めた「遊び」からスタートした。昭和21年4月大学の校友会に、部活としてラグビー部を登録し、その時、森さんが幹事となった。その後、幹事がキャプテンになり、ラグビー部復活の責任を背負うことになった。私は適任者の森さんを幹事・キャプテンによく選んだものだと感心した。練習は始めたものの、初めてラグビーをする人が多く、ルールも解らず、ポジションも決まっていない状態で、佐高（現在の佐賀大）と試合を組んでしまった。ジャージーもシューズも無く、「裸足での対外試合」となり、試合は大敗した。その後、対外試合は継続したが、シューズが無くては、試合にならない。そこで、大学から支給された活動費が小額過ぎて、使われていないことに着目して、他の部活から活動費を借りまくり、念願のシューズを購入したので、練習に熱が入った。他の部員は土方や沖仲仕などのアルバイトでシューズとジャージーの購入資金を稼いだ。

＜部員の勧誘＞

活発な活動をしていない空手部や水泳部など他の部活の人や、大きな人、郷里の同窓生などに声を掛け、次々に勧誘して部員を増やして行った。やり方は飯を食わせ、酒を飲ませて、次の日には一緒に練習してメンバーにしてしまうのである。この手は今でも有効で、良く勧誘手段として使われている。無い無い尽くしの時代に、毎日毎日練習に明け暮れているラグーマンを見て、近所の人とは異常に感じたろうし、また学友からは「気違い集団」と見られていた。学生の中から参加する人も出て来た。この時も大きな力になったのは、ラグビーへの情熱だと森先輩は言った。翌22年4月には、ラグビー経験者

も加入し、チーム力は向上した。

＜強くなりたい＞

当時の名物教授であった「浅野金兵衛」教授から「困難と思われることを成し遂げよ」、「やるからには優勝せよ」と言われた。勉強が好きではなかった森キャプテンは、毎日毎日強くなるどうしたらよいか？と考えていた。森さんはある伝で入手した古本を所有していたので、これを古本屋に売って資金を得た。長崎では原爆で全ての物が焼けてしまったので、古本や辞典が高価で売れた。月に一回は、芋を大量に買い、行き付けの食堂で蒸かしてもらい、お腹一杯食べられる芋コンパを開催した。お腹が満たされると話は自然とラグビーの部活に向かい、強くなろう、その為に練習に励もう、研究しようと思ふようになった。森キャプテンの思いが部員に共有化されて行った。森さんは、ボールを拾い上げる基本的なプレーを繰り返し練習した。

＜試合をしよう・大会に参加しよう＞

いつの時代でも、試合する事がチーム力の向上には不可欠であるが、昭和22年5月頃からラグビーシューズを履いて練習や試合が出来る様になっていた。私が生まれた時期であり、何か縁を感じる。昭和22年9月から、長崎市内の大学生・社会人ラグビー大会に参加し戦った。考えた地道な練習や、戦術研究の成果が現れ、一試合一試合勝ち進み、12月の決勝戦にも勝ってついに優勝した。優秀な人材が集まっていた当時のラグーマンの「志および能力の高さ」に感銘を覚えた。又、勝利への執念を感じた。

＜森さんのキャプテンシー＞

森さんは派手ではなく、目立ちたがり屋でもない。練習を黙々とこなすタイプである。集合写真を見ると端に写っている。ラグビー経験者や、学力優秀な集団を束ねた秘訣を聞いた。彼は「ゲームでのタックル」だと答えた。試合中タックルして、何度倒れたか知れないが、相手はもっと倒れた。タックルすると目から火花が出る程衝撃が強い。当時は、負傷しても交代は出来ないルールで、必殺のタックルで相手を倒す森さんのプレーにより、チームが奮い立ち、勝利を勝ち取った。何度もピンチを救い、チャンスを生み出した。森さんは背中でチームを引っ張るタイプのキャプテンであった。話をお聞きするだけで、当時の姿が目に見えた。私が卒業する4～5年前から、卒業生がラグビー部の薄汚れた部室の壁に、言葉を書き残す習慣があった。私は「ラグビーはタックルだ」と書いた。同じ言葉を森先輩から聞いて感動した。ある先輩は「ラグビーは楽苦備と見つけた」と書いた。またある先輩は「根性を生む情熱を持て」と書いた。森さんの話と通じるものがある。私達は、練習後にラグビーボールを磨きながら、部室の壁に残された言葉を読んでいたが、今はもうこの部室はない。

＜森先輩の若さの秘密＞

森先輩は82歳、奥様も78歳ですが、非常に元気で、夫婦揃って年より20歳位若いそうです。毎年行っている健康診断の血液検査では、森さんは

60歳前半の数値で、どこも悪いところは無いそうです。その秘密は何か？考えて見た。森さんの家は「アムウェイの商品」に囲まれています。ビタミン・ミネラルなどのサプリメントを毎日愛飲しております。鍋や浄水器や空気清浄機などアムウェイの商品を使っています。森さんは今まで通りの健康的な生活を続け、120歳まで生きる目標を立てています。今の森さんを見ると、長生きする目標を達成出来そうな気がします。夫婦でアムウェイの会で健康講演をしているそうです。

<所感>

森さんは、寒い中ラグビー応援にも元気に参加し、支部長としてOB会の総会や飲み会にも全て参加してくれます。森さんから見ると、私も含めた後輩の活動に生ぬるさを感じていると思いますが、私はラグビーへの情熱は持ち続けたいと思っています。又、この森先輩の思いが後輩達に代々伝わって欲しいと思います。

<現役諸君へのお願い>

我が西陵ラグーOB会には約80年の歴史があります。脈々と受け継がれている伝統は、現役諸君がいることで継続します。更に西陵ラグーが強くなり、発展する為に、敢えて現役諸君に以下のことをお願いしたい。

1. 兎に角、部員を増やす努力をして欲しい。非常に厳しいと思うが、最低30名の部員にして欲しい。ラグビーの仲間は君達の生涯の友人になる。青春時代を共に過ごす仲間を沢山作って欲しい。女性マネージャー、プレーはしないサポーターも歓迎して欲しい。
2. 練習をして試合を増やし、勝利への執念を持ち続けて欲しい。
3. 強くするために考えて、必要な資金は先輩に援助要請して下さい。私も協力しますし、結束力の強い西陵ラグーOB会がついております。



森先輩御夫妻のご近影

編集後記

昭和 46 年 九大卒 丸田 堅次

ホームページ掲載方式も 4 回目で皆さんの意識の中に定着してきました。

今回は役割分担がはっきりしてそれぞれの役割をみごとに果たし、原稿がスムーズに集まってきました。その組織力、チームワークには感動しました。

頂いた投稿、資料は形式を統一するために一部、編集をさせていただきましたが、ほぼそのまま掲載できました。

八大学 OB のホームページもバックナンバーも含めて、いつでも見れる状態になっています。

第 1 回目の準備会議から早 20 年。たくさんの関係者が愛した八大学ラグビー大会。次の世代のラグーマンにその情熱を伝え、益々、発展して継続されることをうれしく思います。

4 月 26 日（土）に皆様が秩父宮グラウンドでご活躍されることを祈念しております。

2008/04/09